慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アンドレ・ヴュルムセル『非人間的な人間喜劇』について : (André Wurmser : La Comédie inhumaine, Gallimard, 1964.)
Sub Title	La Comédie inhummaine, by André Wurmser
Author	高山, 鉄男(Takayama, Tetsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1966
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.21, (1966. 4) ,p.68- 71
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00210001-0068

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

アンドレ・ヴュルムセル『非人間的な人間喜劇』について

(André Wurmser : *La Comédie inhumaine*, Gallimard, 1964.)

高山鉄男

左翼系の小説家兼評論家、アンドレ・ヴュルムセルの『非人間的な人間喜劇』は、一九六四年に、ガリマール書店から「思想叢書」の一冊として刊行されたもので、七百頁をこえる浩瀚なバルザック論である。ここには、バルザック研究上、さまざまの興味ある問題が提出されているように思われるので、本書の内容を簡単に紹介するとともに、若干の疑問点をも述べてみたい。

この書の魅力は、何よりも、バルザックの作品やその背景に関しての細部の分析にあるように見えるし、それに分量からしても、この大部の論文を要約することは殆んど不可能に近いのだが、しかし、著者ヴュルムセルの主張せんとするところは、その骨子においてはむしろ単純なものである。それは、およそ次の様なものだ。

(1) バルザックは、作品において、資本主義社会の機能と現象とを忠実に再現した。

(2) その結果として、バルザックは、資本主義社会に固有な矛盾と非人間性とを明らかにし、彼は意識的には反動的な政治思想の持主だったが、結果的には革命的な作家となった。

(3) バルザックは、ブルジョア社会を描いただけでなく、自分自身、その精神において典型的なブルジョアであり、もっぱら経済的利益のために小説を書いた。

まず(1)についてだが、これは、徹底してバルザックを写実主義作家としてとらえる見方であって、「バルザックは、摸倣したのではない。模写したのだ。」と言う著者の主張は、それ自体としては、何ら独創的なものではない。むしろ、これはゾラ以来、もっとも一般化しているバルザック観であると言えるだろう。ただ、第二次大戦後のバルザック批評は、どちらかと言えばバルザックの作品の幻想的、想像的側面を強調し、神秘家、乃至は、幻視家（ヴィジョネール）としてのバルザックを好んで論ずる傾向にあったので、ヴュルムセルの書は、こうした傾向への強烈な反論として注目される。

バルザックが、すぐれた観察家であり、『人間喜劇』が、十九世紀西欧社会の精緻を極めた年代記であることは、疑いようのない事実である。ただ、問題は、バルザックの小説が現実を再現していることを疑い得ないと同様に、それが幻想の世界であることもまた動かし難い事実だと言うことにある。

バルザックは、現実の忠実な観察家であったか、それともまたむしろ幻想の人であったか、という問題はしばしば論ぜられる手垢にまみれた問題であるけれども、問題提起の仕方そのものに間違いがある様に思われてならない。これは一種の〈偽の問題（フォー・プロブレーム）〉ではあるまいか。バルザックの死後、ゾラの様な小説家は、バルザックを自然主義作家であると規定したが、他方、ゴーチェ、ボードレールなどは、バルザックは、むしろ幻想の文学者であると主張した。そしてこのような相対立したバルザック観が、現代のバルザック批評にまで持ちこされている訳で、こうした対立の根源には、十九世紀後半におけるフランス文学の分裂が介在していると言えそうである。

ところで、バルザックの小説の写実主義的傾向を強調する批評家は、多少ともバルザックのうちに歴史家を認め、芸術的価値を歴史的価値によってすりかえてしまっているように思われる。他方、バルザックの神秘主義的・幻想的傾向を重要視する人々は、バルザックのうちに神秘哲学者を見、小説の文学的価値を、小説に現われている神秘思想の価値によってすりかえてしまっているように思われる。けれども、バルザックは要するに、芸術家であり、小説家であったので、歴史家でも思想家でもなかった。とすれば、文学創造に

おいて、観察と想像とがともに重要であり、両者はしばしば同じ一つのものでさえあることは自明ではあるまいか。したがってまた、作品が現実に依拠しつつ、尚且現実を超えるものであることも又自明のように思われる。だから、重要なのは、バルザックの小説がもっぱら観察にもとずいているか、それとも想像によって書かれたかを論ずることではなくて、バルザックが如何なる現実を如何に再現し、そこに如何なる変更を加えたかを知ることである。バルザックにおける文学創造の過程を究明し、その観察と想像の構造を明らかにすることこそ、むしろ肝要ではあるまいか。近年、バルザックの創作過程に関する実証的知識は、急速に増大しつつある。そして、作品の成立に関する研究が進むとともに、バルザックが如何に多くを現実に負うているかが明らかになるとともに、またバルザックが現実を如何にしばしば変形して作品に再現したか、ということも同時に明らかになりつつあると思われるのである。

要するに、バルザックが現実を「模写した」ということをいくら強調しても、それは無意味だろうし、さらに著者ヴュルムセルがレアリスムの名のもとに『あら皮』をはじめとする幻想小説の価値をすべて否定する時、それは、大方のバルザック研究者の良識に反するものだと言わざるを得まい。実際、バルザックにあっては、幻想的傾向は、写実的傾向と分ち難く結びついている。『あら皮』には、パリ社会の写実的な描写が豊富に見出されるし、「写実的な」『風俗研究』中の、たとえば『ピエレット』は一種の幻想小説のようにも思えるのである。『ピエレット』の後半、老嬢のログロンが、仮借ない残忍さをもって美少女のピエレットをさいなむのを見る時、読者は妖精物語でも読んでいるかのような錯覚にとらえられ、ログロン嬢は魔女のような鬼気をただよわせはじめないだろうか。

原則論的な問題に関して、筆者は『非人間的な人間喜劇』の著者に対し、以上のような不満を禁じ得ないのであるが、しかし細部の論証においては、この書はまことにすぐれた示唆に富んでいる。ヴュルムセルはバルザックの時代に関する尨大な学識を縦横に駆使して、作品の世界と現実の世界の照応を論じ、『人間喜劇』に描かれた社会的諸現象（たとえば財産の成立と移転の問題）の意味を追究している。論考は、広汎かつ細部にわたり、饒舌で歯切れのよい文体は読者を倦かしめない。

さて、次に(2)についてであるが、『人間喜劇』が市民社会に固有の矛盾と悲劇を描いていること、しかもそこに現われているものが、もっともしばしば、悲惨且、「非人間的な」――本書の題名にある「非人間的な」という形容詞は、『人間喜劇』のそのような性格

を指している――世界であることは異論の余地のない所であろう。ただ、著者の説くように、『人間喜劇』の悲惨がもっぱら資本主義社会の矛盾にのみ帰しうるものかどうか、資本主義の消滅とともに『人間喜劇』の一切のドラマが無意味なものと化すものかどうか、は筆者の疑問とせざるを得ない所である。『人間喜劇』に展開する欲望と執念の劇は、歴史的なものであるとともに歴史を超えたものでもあろう。リュシャンの幻滅と、ヴェロニックの悔恨、これらは社会的なものであると同時に、それ以外のものでもある。バルザックの描いた人物たちの精神を、多元的な、或は多層的な構造として把握することが必要ではあるまいか。

それから、バルザックは意識的には反動思想家だったが、作品においては、いわば無意識的に革命的な文学者だった、と言う立論にも、若干の、或は相当の留保をつけていいと思われる。ベルナール・ギョンのバルザックの政治思想に関する研究は、バルザックが正統正朝主義者などでは全くなく、むしろ一種の無政府主義者だったこと、しかも意識的にそうであったことを示しているのだから。

すでに所定の枚数もつきたので、(3)の問題について論ずることを差し控えたいが、ヴュルムセルのバルザック論は要するに極めて論争的な書であって、著者の極端な断定はしばしば読者を懐疑的にするけれども、これはやはり書かれるべくして書かれた書であり、現代のバルザック研究にとっては必要な書だったと言うことが出来よう。一方ではヴュルムセルは、バルザックの形而上的・幻想的側面を強調する批評家たちを攻撃した。そしてその意味では、クルチウス、ベガン、ピコンなどのあまりにもすぐれたバルザック論のおかげで、時代の証人としてのバルザックの価値を忘れがちだったわれわれに、『人間喜劇』のそうした側面をあらためて認識させてくれるのである。また、著者は、文献的、講壇的なバルザック研究をもきびしく批判している。そして、その意味においては、尨大な量に達するバルザック文献をある時はことごとく忘れて、『人間喜劇』のあの昂奮と幻惑の世界に再び立ち戻るべく、この書はわれわれをいざなってくれているのである。